

# 八尾歴史物語

二五巻

天誅組に参加した伴林光平

天誅組をご存じですか？天誅組は尊皇攘夷を掲げ、主将の公卿中山忠光、総裁の吉村寅太郎らを中心に文久3年（1863年）8月13日に、大和五条の代官所を襲い、五条御政府を開きました。これに最年長の50歳で記録方として参加したのが伴林光平です。

光平は、文化9年（1813年）、志紀郡林村（藤井寺市）の尊光寺で生まれ、西本願寺などで仏教の修行に励み、その後、和歌や国学を学びました。そして、33歳から16年間、若江郡成法寺村（現在の八尾市南本町）にあった教恩寺で住職となり、顕証寺や大信寺などで歌道指南役を務め、奈良の興福院や中宮寺の歌会に参加するなどして、和歌や国学を教えています。

また、大和や河内の古墳の調査を行い、『大和國陵墓檢考』『野山のなげき』など数多くの書物



伴林光平碑

を執筆していますが、古墳の図面と共に地名や村人の言い伝えを記録しており、当時の古墳の状況が分かる貴重な資料となっています。

このように、学問や和歌にいらしていただいた八尾での生活は、光平にとつて最も穏やかな時代だったといえます。しかし、文久元年（1861年）、48歳になつ

た光平は「本是神州清潔民」に始まる仏教と決別する七言絶句を残して還俗し、尊皇攘夷運動に身を投じます。天誅組の戦いは、政治の流れに翻弄され、およそ一カ月で終わりますが、その記録は光平によって『南山踏雲録』として残されました。

今年は、光平の生誕200年、そして天誅組の決起から150年にあたります。南本町にある教恩寺跡と奈良への通り道であった十三街道の玉祖神社の傍らには、光平追悼の石碑が建てられています。